

王陽明の生涯にわたる出处の問題と講学の意義

劉珉

王陽明の生涯を見渡すと、常に出处の問題がつきまとっているように思われる。陽明がよく『中庸』の「其の位に素して行ふ」、「入るとして自得せざるは無し」などの語を引いて強調するように、その思想は「出」か「処」かにかかわらず、どのような立場にも十分対応できるもののはずであった。しかし現実には、陽明は一生「処」を求め続けていたと言ってもよい。とくに龍場以降は、それが生涯の揺るぎない信念のようになっていた感がある。とはいえ、このような「処」の志向を陽明は全面的に認めたわけでもなく、ともに南京に奉職する旧友の喬宇に対しては「黄閣 公の長く秉軸するを望む、滄江 我の老いて垂綸するを容れん」(『外集』二)と、自身の引退とは裏腹に相手の栄達を言っているし、またのちに陽明が地方官僚として天下に轟くほどの功績を挙げたことも、周知の通りである。

陽明はこのように、主観上は「処」を求めながら最後まで出处の間を揺れ動いていたのであるが、その「処」への願望は、常に講学という目的と結びついていたことが、多くの詩文から読み取れる。周知のように、陽明は講学に全精神を傾けた人物であり、それによって人々を導いて天下を救おうとしたとも言われている。しかし一方で、「多く口耳に流る」(『伝習録』上)という講学の限界も、彼には早くからわかっていた。また講学の対象も、南京時代を例に言えば、喬宇のように社会的地位が自分と同等あるいはそれ以上の人ではなく、主に進士に合格するかしないかの若者に限られていた。そのような限定的な範囲のなかで、陽明は講学にどのような効果を期待し、どのような意義を見出していたのか。

生涯にわたる出处の問題と、限定的な範囲での講学活動。本発表ではそれらの意味するところを探ってみたい。